

君も考えを出しなさい



梓設計社長 有吉 匡
ありよし きょう

30年前、入社3年目で福岡空港国際線ターミナル設計の新築プロポーザルチームに抜擢された。当時の日米構造協議により、世界的規模を誇る米国の設計事務所HOK（ヘルムース・オバタ・カッサバウム）と組むことになった。すでに梓設計は多くの空港を設計していたが、成田空港で築いた国際線の設計技術が活かせるこのプロポーは全社挙げての取り組みだった。HOK側の熱意も高く、世界的な建築家であったバレンタイン取締役がメインアーキテクトとなった。

デザインコンセプトの立案には日米双方が、役割分担を決めずにアイデアを出し合い、膝を付き合わせて日夜ミーティングを重ねた。そこでの座長バレンタインの進め方には驚愕した。出されたアイデアを受け止めては、大きな白板へ本人自身がスケッチを殴り書いていくのである。その一本一本の線は力強く、なんとか形を見つけ出そうとする強い意志がひしひしと伝わり、チームの熱量がマグマのように高まっていくのを感じた。そんな熱意の中、居並ぶ先輩の前で遠慮していた私に彼が言った。「君も考えを出しなさい」。私はほとんどん施設機能を調べ上げ、次の会議で自分の考えを発表した。バレンタインは日本の若造の話に、あたかも新たな「知」に触れるがごとく、真摯に受け答えしてくれた。以降、これに触発された日本側スタッフの発言が増

えていったことをよく覚えている。盛り上がりつつ一体となったチームは、機能とデザインを融合した新しいターミナルコンセプトを生み出し、プロポーザルに当選する。この時から、臆さず意見を言うようになった私は、協働チームのメインメンバーとなり、米国の設計手法や開拓精神、当時の先端デジタル技術にどっぷり触れることになった。

バレンタインゆずりの「白板に『熱意』を持って殴り書く」ことは、その後、私が経験した多くの大型プロジェクトでも実行している。羽田空港国際線ビルでは、福岡空港国際線で培ったコンセプトをさらに発展させることで、国際空港の新たな形を作り上げることになり、結実し、また、福岡空港国内線では、地下鉄とのダイレクトアクセスを創意工夫で成し遂げた。それらは、社内外全ての参加者の「知」を集集することを常に忘れずに、大事にしてきたおかげであると思っている。

社長になった今も、若い人たちには、常に自分の考えや感性を出すように伝えている。そして、それらをまとめる立場としての振る舞いは、いつまでも忘れずに示したい。彼らは、白板でもデジタルでも、きつと時代に合ったやり方で知の結集を果たし、熱意を持って新たな時代に立ち向かってくれると確信している。